

要する、亦なほ此の如きか、蓋し人、業に専られば従て其業に興味を生ずるに至ると雖も、一年三百六十餘日、朝夕暮々同一の日課をくりかへして、又他を顧るとなくんば、能く疲倦を來すとなからむや、此間一日の業を廢して遊戯に充て以て氣力の恢復を圖らば、疲倦を醫して愉快に再び業に勵むを得む、殊に多數の男女を雇使する家に於ては最もその必要をみる、遊戯は擧族共に樂しむを得るものなるべく、春は東風吹く野への蕨探り、秋は紅葉濃き山路の茸狩など、興趣と健康とを併せ得て、一家の和樂に資すると大ならずむばわらず。かの西洋の人は、安息日の至るや擧家行厨をたづさへて山隈水涯に遊び愉快に一日を暮らすを常とすといふ、わが邦人の生活に餘裕なきは誠に恨事にわらずや。その家庭の無趣味にして快

潤を缺くも畢竟之れがためのみ。

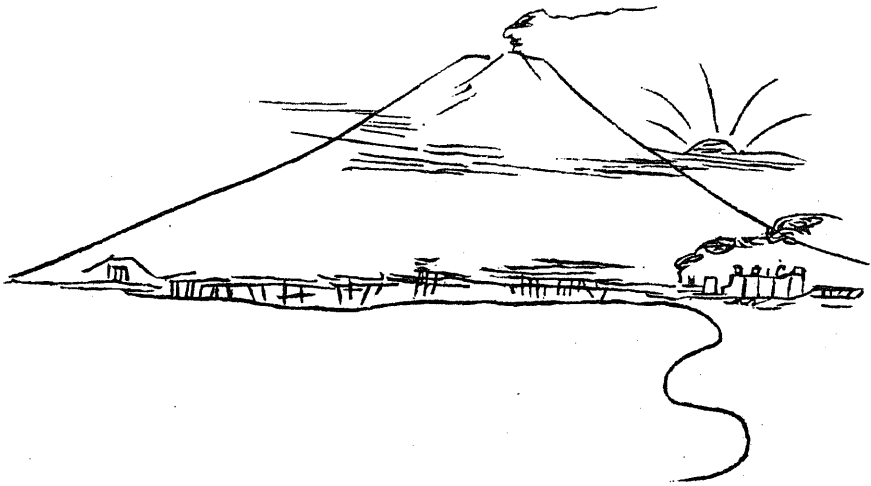
以上神門女史の説をよみて感ずる所を記す、説いて盡さざるところあり、他日を期せむ。

余が實驗せる特殊なる家庭と

その兒童

岩手縣師 菅原 文一郎
範學校

私はかく大氣さにいるのは、實は本意ではありませぬが、只私が地方にありて、一寸餓鬼大將をやつたときに、或る一人の生徒について、大に感ずる所があつたので、之れは自分ながら、小供を育てる上について、大に氣をつけなければならぬ所だと思ひましたで、遂筆の拙いのも顧みず、感じたを述べようとする次第でございます。



五年十月月の男子本誌
登載の子供の繪を見之
を批評して自ら齎ける
ものなりと福島縣の讀者より寄せらる

さてその兒童は、私の居つた時は、四年級の生徒で最も優等ではございまして、惜しいことには、體の弱いことであります、顔色なども青ざめてやせ細り不活潑でありました、地方などは、却てかういふ柔弱なおとなしいというてほめて居りますが、之れは一つの通弊だと思ひます、私はどーもこの生徒は、不活潑でならないから、少し活氣をつけてやらうと思つて、始終その方に向けてよーとしましたが、中々思ひ通りには、いきませんでした、まづ學校に居て今歸らうとする時などに、俄か雨がふりましても、他の生徒などは、少しも氣にかける風が見えず、下駄をぬぎ、裾をまくりて駆け出し、中には今に迎へにくるのが知れて居りながら、わざと駆け出すというよーなものもありました、この生徒にかぎつては、ちつと

もそーいうことはありませぬ、夫れで時にはわざとすゝめたこともありましたが、今に晴れるとか迎へに来るとかいうて、少しも勇気というよーなことはないのです、勿論體操の時間などにも、少し荒い事をやると、泣き出すというよーな鹽梅ですから、どーも困つたのです、して「私は、折を見ては活潑に活潑にというものだから、小供心にも、叱られると思つたでしよーか、だんくには私をいやに感ずるといふよーな模様も見えたのです、夫れでどーしたらよからうかと、始終考へましたが、先づ第一家庭ではどーいう風に育て、居るだらうか、之をさがすのは、教育する上から肝要であると思ひまして、今度は遊びの時とか、或は、放課後遊びに来た時などに家庭の事状などをきいたのです、初めは中々耻かしがりてはなさな

かつたでしたが、だんく、少しづつはなさせたのであります、先づうちの人などをきいたら。

おぢーさんにおばーさん、お父さんにお母さん夫れから、一人の兄さんと、二人の弟と今では八人ですが、元とは二人の姉さんまで、十人ありました、二人の姉さんたちは、他所に嫁れて居ないけれども、お正月や、盆などには來ますなどをはじめとして、夫れから、おぢーさんが

父母之年不可不知……というて、家の人の年を知らないのは、不孝の一つであるから、よく忘れないよーにと、教へてくれたとて、一々年などまで語りました、夫れから、誰れと寝るかと問うたら一番小さい弟はお母さんと、それから中の弟はおばーさんと、そして私はおぢーさんと寝ると、まがほになつてはなしました、夫れから、いろいろ

ろな間をしました所が、おぢーさんは、未だ夜の明けないうちから、目をさまして、書物を教へたり、昔話しをきかせたりするものだから、弟たちも這入りたがつて起きて来るなど、ありわり目に見ゆるよーにはなしました、そしてこの生徒はおぢいさんに教はつたというて

大學朱熹章句 子程朱曰大學者孔子之遺書而

初學入徳之門……とか或は

關々唯鳩在河之洲窈窕淑女君子……と

か

先づ大低の書物を誦誦しました、勿論意味などは分らなかつたけれども、何しろ家庭のちがうということだけはわかりました、

尚ほ昔はなしなどについても、道真とか正行と

か、牛若丸とか日吉丸とかについて、まるで小供

のはなしの様でもなく、眞に同情を表して熱心に語るには、實に一驚を喫せざるを得なかつたのであります。

とにかくこの兒童は、朝夕、おぢーさんに育てられる様子であるから、委しくおぢーさんの事をきいたのです

さてこの生徒のおぢーさんは、舊幕時代には、膽煎とか檢斷とかを務めた人とかで、村での學者だそうです、教鞭こそ手にとらないが、中々小兒教育は熱心にやつて居るそーだ、かゝる人は中々世にも稀れであらうと思ひます、そしてこの老人は、中々果樹栽培に熱心であるそーだが、全體この地方では、梅とか桃とか栗とか林檎とかすべてなりものについては小供ばかりでなく、大人までも他のものを盗むというよーな、弊風があつたの

で、之れは小供らの罪ばかりでなく、全く両親が
 わるいのである、自分の家にないから、自然かう
 なるのだ、かういう心が増長しては恐るべきもの
 であるということ、痛く心配して、あらゆる果
 樹をうゑて、決して盗むというやうな心を小供ら
 に起させぬやうにと、人にも聞かせ、小供らにも
 平生言ひ含めて居るそゝだが、中々言うて見れば
 雑作もないことであるが、かゝる人は、ありがた
 い事と思はれる、かゝる教への庭に育つた子供ら
 の立派なこと、言はずも明かなことでありましょ
 う併しをしい事には、昔人だけで、體育にはあま
 り、感服しない事もある、又この兒童の薄弱なの
 も、この祖父の缺點でありはせぬかと、疑はれる
 のである。

(未完)

子供心

長野 飯島八千溪

▲或所に、六七歳になる、女の子が有りました。
 或日、お隣へ遊びに行きましたに、其時丁度、お
 隣の叔母さんが、着物の蚤を捕つて、火鉢にくべ
 て居ました。そゝすると、其女の子が「アレこゝ
 の叔母さんわ、蚤を焼いてたべるの、私のとこの
 おつかさんわ、生でたべますよ」と話しました。
 ▲又或所に、貧乏で、三度の食事も、甚だ、粗末
 で、寝るに布圍もなく、僅に、藁屑の中に寝ると
 云ふ、憐な暮しをして居る、家が有りました、或
 時、父が其子に「お前わ、決して、人に藁屑の中
 に寝るなど、云つてわ、なりませぬぞ」と、云ひ
 聞かせました。すると、或日の事、父が藁細工を
 して居る所へ、人が来て、話しをして居る、其時